

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第31巻第1号 (2024 年 1 月 5 日)

メール版 ASSB を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993 年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第 4 巻 (1996 年) からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDF ファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015 年度の『ASSB』の PDF ファイル。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239

2016 年度の分は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240

2017～23 年度の分は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8799 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

31 巻第 1 号 目次

はじめに

軍産複合体との陣地戦に向けて——現代の戦争論

(基礎講座第三講第二部の文字起こし)

解題 序論

第 1 章 冷戦以降のヴィリリオの戦争批判

第 2 章 現代の戦争論

1. ペンタゴンの戦争論

2. 国際政治の理論の古典一瞥

第 3 章 戦争はなくせるか、人類学的戦争論

第 4 章 軍産複合体との陣地戦に向けて

後記

はじめに

前号の発行が昨年 4 月でしたから、ずいぶん遅れてしまいました。歳が歳なのでご心配をおかけしたかもしれません。戦争が始まってから戦争の廃絶をめざして調査研究を続け、新しい陣地戦の理論の探求も進め、日米安全保障の調査や、野党の理論的提換の必要性の提起までは、何とか収録してきました。

その後『協同組合運動研究会報』はずっと発刊し、それに書いており、このところ、会報掲載の原稿を収録するという形でやってきたのですが、会報の内容が連載の中断などがあって、そのまま掲載するのがためられ、ずっと現在まで続いてきたのです。

未収録の会報は、331 号から 339 号までですが、日本社会の失われた 30 年の原因解明で、331 号と 332 号を連載で出した後、日本政府は破局に直面しているのではないかという疑惑が頭をもたげ、その見通しを確かなものとすべく迂回していろいろ調べたのです。これまでの知識では間に合わない調査が多く、すごく時間がかかりました。

いろいろありましたが、結論的にいって、戦争が始まった時の私の問題意識である、戦争の廃絶に関して一つの理論的提起ができました。その内容はまだ未熟で、文化知普及協会の内部討論でもずいぶん意見をいただき、これから一つひとつ調べていくつもりですが、今回の本誌の内容が現代の戦争論なので、戦争廃絶の提案の内容を先走って以下に引用しておきます。これは、縮小社会研究会が冊子の原稿を募集していて、年末に寄稿した原稿の最後の部分です。

「4. 戦争の廃絶のため

ロシアによるウクライナ侵攻以来、陣地戦・戦争・日米関係について調査研究し、またイスラエルのパレスチナとの戦争が起こったことで、入植者植民地主義の批判が必要だと感じて、植民地主義の歴史を調べました。その内容は『協同組合運動研究会報』に掲載しています。

ここでは、これまで会報で提起した内容を踏まえて、戦争をなくすことについての提言を行います。

まずは、米国が現在も入植者植民地主義を実施していることについて簡単に説明します。入植者植民地主義の特徴は、フロンティアとして位置づけた領域で、先住民を暴力的に排除し、白人の国家を拡大していくところにありますが、そのスローガンが『明白な使命』です。米国の場合、私的所有・資本主義・工業化がなされていない先住民を駆逐して白人の国家を拡大していくことは、神によって与えられた使命であるということです。

現在米国のフロンティアは全世界です。そこで米国とは異なる政治体制に対して、それを米国と同等なものにしていくことが、現在の『明白な使命』です。そもそも合衆国は、伝統社会を破壊し、先住民の土地を奪って創り出された人工的な国家でした。それに対して、世界では、そのような国家はまれで、ほとんどが伝統社会に立脚しその影響を残した国家となっています。イスラム圏では民主主義国家自体が形成されておらず、社会主義革命を経た中国では共産党の一党支配が続いています。ヨーロッパでも多くの国家が王制を維持しています。

このような世界は、米国からすれば、米国型の共和制に至らない多くの国家があり、これが米国にとってフロンティアとして位置づけられているのです。そして、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争、アフガニスタン戦争、といった戦後の米国の戦争は、開戦の直接の動機とは別に、対戦国を米国型の共和制へと改造するという戦争目的が維持されてきたのです。

『自由と民主主義、法の支配』現在も声高に主張されているこの言葉こそが、現代版『明白な使命』であり、米国から見て、このような体制が確立されてはいない国家に対して、この体制をつくり出すべく揺さぶっていく、これが絶えず米国が続けている対外政策です。

ではこのような現代の米国の入植者植民地主義とどのようにして抗うことができるので

しょうか。

現在のイスラエルのパレスチナに対する戦争は、正真正銘の入植者植民地主義であり、それも先住民であるパレスチナ人を追放し、抹殺するという最も残虐なものです。ネットが発達しSNSで自由に情報が発信される時代にこのような残虐な戦争を見せられることで、旧植民地の人々は当然、植民地時代の西欧による『野蛮人』としての扱いを思い出し、植民地主義への抵抗の必要性を痛感するでしょう。また西欧諸国にしてもかつて自分たちがおこなってきた植民地主義を、現在あからさまに見せつけられることで、過去の植民地主義を反省する契機となるに違いありません。このような世界中の人々の心情に根差すことで、戦争をなくすという人類の宿願を実現する展望が開かれてくるように思われます。

近世以降のヨーロッパの戦争は植民地をめぐる覇権争いでした。また、戦争をなくしたいという思いを実現するには、デイン・ケネディ『脱植民地』（白水社、2023年）が問題提起している国民国家の限界の考察とその克服が不可避なことでした。考えてみれば、中世から現代まで絶え間なく戦争を続けてきたヨーロッパが、脱植民地主義の時代に、EUを形成したことで、ラトゥールが言ったように、ヨーロッパ各国は戦争を克服できたのでした。これは国家の限界を乗り越える試みであり、コスモポリタンの歩みでした。

しかし、そのEUが、米国主導のNATOの覇権主義に巻き込まれ、その存在意義を試されています。と同時に、今回のイスラエルによるパレスチナに対する戦争は、入植者植民地主義の克服が現代的課題であることを突き付けています。グローバルサウスだけでなく、旧植民地宗主国においても、植民地主義の克服と戦争の廃絶に向けた抗いが始まりました。

西欧に対する過去の植民地主義への批判を西欧自身に行うように促進している運動が、カリブ共同体のカリコムによる賠償請求運動です。すでにオランダ等が、部分的に応じていますが、この運動が国際政治の焦点となるような時代を創り出すことが、戦争廃絶の第一歩であり、その道は米国の入植者植民地主義に抗うコスモポリタンの陣地戦によって切り拓かれるでしょう。

（カリコム賠償運動のHPは以前はアクセスできましたが、現在はクーグルによって、危険なHPと表示され、アクセスできなくなっています。）

このような戦争廃絶論に至る私の歩みを、1月中に、本誌を数号連続して発行することで報告したいと考えています。

軍産複合体との陣地戦に向けて——現代の戦争論

（基礎講座第三講第二部の文字起こし）

解題

戦争の廃絶、というテーマで講義を行い、その録画を文化知普及協会HPで公開していますが、第二部の講義では、当日報告の読み上げではなくて、いろいろ話しました。それでそれを文字起こしました。私たちが、戦争の廃絶のために踏まえるべき戦争論の要諦を提示しました。できれば『ASSB』誌、第30巻1号に収録されている当日報告文書を参照しながら読んでください。なお、第一部の報告は『ASSB』誌、第19巻6号に掲載しています。

まず講義の目次をあげておきます。

第1章 冷戦以降のヴィリリオの戦争批判

第2章 現代の戦争論

1. ペンタゴンの戦争論

2. 国際政治の理論の古典一瞥

第3章 戦争はなくせるか、人類学的戦争論

第4章 軍産複合体との陣地戦に向けて

この文字起こしもこの順序です。

序論

基礎講座のテーマ変更

元々この基礎講座というのは、戦争論をやるとは思っていなかったもので、戦争の本を何冊か読んで、それをまとめているという段階です。とりあえず前回、基礎講座第三講で「人類学的知性による戦争の文化の克服」というテーマを掲げました。それはダワーの『戦争の文化』（岩波書店）という本がちょうど出たばかりで、それをたまたま買っていたので、それを読むことで、ダワーの提案していることはやっぱりこれを継承して、具体化しなきゃいけないんじゃないかと思ったことがあります。

それから、私の今までの政治的経験から言うと、反戦というのは当然反戦なんですけれども、今回のウクライナの問題にしても、私はやっぱり即時停戦ということしか言うことではないんじゃないかと思っています。そして、この戦争を人類最後の戦争にしたいという、思いがあるんですよね。そういう観点から、今日の報告をさせていただきたいと思いますが、その運動の手段が、実は陣地戦という独特の理論、これを作らなければならないというのが大きな目的の一つです。

新しい陣地戦の理論

これまで階級闘争は、階級闘争の理論でもって武装して、それで党派が中心になって運動を組織してきたんですが、どうもそういう運動ではもうかなわないんじゃないかというふうに思いました。でも、こういうことに気がついたのもごく最近のことです。このパワーポイント（文化知普及協会HP掲載）と一緒に添付した『唯物論研究』という雑誌の11月号ですから、去年10月ごろ書いていたんですけれども、その本に寄稿させていただきまして、「階級闘争の理論から陣地戦の理論へ」という論文を書きました。

それで、陣地戦ということがなぜ必要かということについて予め説明しておきますと、日本で陣地戦というテーマを掲げて実際に実践したのは、生活クラブなんですね。生活クラブという生協があるんですけれども、その創業者の岩根さん、まだご存命ですけれども、彼が元々世田谷で社会党から立候補して選挙をやっていたんですけれども、そういう形では駄目なんじゃないかと。地域で陣地を作らなきゃいかんというふうに考えたところ、地域には昼間は女性しかいなかったわけですね。そういう中で、じゃあ女性を組織しようということで、牛乳の共同購入を始めたというのがきっかけなんです。その前に、グラムシというイタリアの理論家の理論が60年代初頭に日本に輸入されまして、陣地戦という言葉をもうみんなが使うようになっていたんです。岩根さんの陣地戦というのは、やっぱり階級闘争の理論とはちょっと位相が違って、地域に拠点を作ろうと、その拠点を支えるのが生協という事業体なんですね。そういう事業体が元になって、それ自体が次のより良い社会を作っていく、そういう仕掛けの中心になると。それで、購買生協をバックに、新しい働き方、もう一つの働き方とも言われますが、雇われない働き方ですね、それを実現しようということで、ワーカーズコレクティブ運動というのをやり、同時に地方議会に代理人運動という形で議員を送ろうというような、そういう3点セットでやり始めて、それを陣地戦というふうに位置づけていたんですね。

私も80年代後半から、政治運動じゃ駄目なんじゃないかということで、社会運動に身を転じまして、その時に京都でもう一つの生協を作ろうという運動がありまして、この運動に参加したんですけれども、そのモデルが生活クラブだったんです。生活クラブをモデルに、京都でエル・コープという生協を創業するメンバーの一員となりましたが、その時に、やはり陣地戦のイメージというのが、元々政治運動をやっていたこともあって、ぴったりきて、それで何とか頑張ってきたという経過があります。

ところが、長らく政府に拒否されていた労働者協同組合法がやっとできまして、あれは一昨年（2020年）の暮れでしたか、去年（2021年）の1月頃から、これについて説明・解

説してほしいという話が、私も属している京都の縮小社会研究会という一般社団があるんですけれども、そこで報告することになりまして、それで打ち合わせしていたらどんどん構想が膨らんで、4回にわたって報告いたしました。その時に、自分自身、生活クラブも含めて陣地戦をやってきたけれども、どうも思ったほど成果を上げていないということに気づきまして、それが一体なぜなのかということ在必死で考えざるを得ないという形になりました。そして思い当たったのが、日本の官僚支配の特殊性でした。

石井紘基という人、暗殺された人ですけれども、彼が日本の特別会計の闇に切り込んで、民主党の国会議員でしたから議員特権を使って調査して、それを本にまとめていました。その本は読んでいましたので、日本の官僚支配がいかにもひどいかということは理解していました。

『唯物論研究』の論文でも、昔書いた論文を引用しながらその説明をしています。結局、この日本の官僚支配は、特徴的に言ったら、民間企業よりも国にぶら下って働いている人の方が数が多いという現実があるわけですよ。2人に1人は官で飯を食ってる、そんな状態でしたら、陣地戦なんて言ったって、元々、官が人々に寄り添わないわけですね。非営利事業の領域でも何か新しい運動が起こってきたら、それに寄り添うんじゃないで、補助金を使ってそれを系列化して、縦割りにしていくということを一貫してやってきたということが、今頃やっとわかりまして、これでは駄目だと。そうすると、日本で陣地戦というふうに考えると、これはやっぱり官僚が市民社会の中に陣地を作っているということに對抗して、それに対する対抗の運動としてやらなきゃいけないんじゃないかなということに気づきまして、そういう報告をしたんです。

そういうことがわかってきたので、京都で陣地戦研究会というのを作りまして、エル・コープの創業者でもう退職した人が何人かいますので、その人たちと一緒に研究会を始めました。それで、陣地戦をどういうふうに戦っていくかという時に、私には元々、非営利事業の陣営に社会的連帯経済という未来像があって、ヨーロッパには現にその担い手である社会的企業が発達しています。私はそれを日本に輸入しようということも、大阪でやってきたんですけれども、それをはかばかしくないというふうなことを考えているうちに、社会的連帯経済の日本型モデル、つまり、陣地戦をやりながらそういうのをたくましく作っている事例というのがいくつかあるということがわかってきました。

名古屋の南医療生協が一つだし、それから、いわゆる地域電力、新潟では「おらって発電所」というんですけれども、そういうのが人々の横の繋がりを作っている、そういうモデルになっているということがわかってきました。そして、そういうモデルをどう作っていくかというようなことを考えておりました。ところが、突然戦争になってしまいました、さっき言ったように、この戦争を最後の戦争にしたいという意識が頭をもたげてきて、この間、一生懸命、戦争の本ばかり読んできたという経過があります。

もう少し言いますと、実はこの『唯物論研究』に掲載した論文ですけれども、これにこういうことを考えていたんです。日本での陣地戦が、官僚が陣地を作っていることに対する抗いだろうというふうにはっきりさせると、官僚の後ろには実はアメリカが居るわけですね。そうすると、やっぱりそれをどうするかということを考えない限り、一貫した方針にならないんじゃないか。ですから、非戦・非核ですね。そういう形で問題を捉えて、それでアメリカに対して外交政策、外交を行うというふうなことをやらなきゃいけないんじゃないかということを書いたんですね。ところが、そんなことをすぐできるとは思ってなかったんですけれども、そういうことを現在考えて、実際やらなきゃいけない。軍産複合体との陣地戦というのはそういう意味ですね。そういうことを実際、私達やんなきゃいけない、そういう具体的な課題としてそれを考えなきゃいけないということになっているんじゃないかということで、今日の報告をいたします。

この報告の概要

まず、冒頭に掲げた目次に沿って概要を説明しておきます。ヴィリリオの戦争論は前回

もやったんですけれども、私はこの人に関しては、酒井隆史さんが暴力についての本『暴力の哲学』（河出書房新社、2004 年）を出してしまして、その中にヴィリリオの説がずっと紹介されていたんです。ですから、随分前にヴィリリオの本を 3 冊ほど買って、読んでいたんですね。線を引いているところを前回引用したんです。ところが、彼は 2018 年まで生きていた人で、ロシアの 2014 年のウクライナに対する戦争と言えるのか、とにかくウクライナに対する介入ですね、これについては多分何も書いてない。ちゃんと調べていませんが、書いていないようなんですね。なので、とりあえず、冷戦以降のヴィリリオの、戦争論じゃなくて戦争批判です。一貫して戦争批判ですね。それをかいつまんで紹介いたします。

それから第 2 章が現代の戦争論で、ここでちゃんとやっておきたいのは、ペンタゴンの戦争論ですね。これはミアシャイマーという人が『大国政治の悲劇』（五月書房新社、2017 年）という、最近訳されていますけれども、それをたまたま私読みまして、これはペンタゴンの戦争論を活写しているというふうに考えました。やっぱり日本人である以上、最低これぐらいの知識は皆さん持っておいてほしいということで、これを紹介しました。

あと、国際政治の理論という領域がありまして、ミアシャイマーもそれを継承して理論を作っているんですけれども、いくつかの古典について簡単に一瞥しています。

それから、戦争はなくせるかということで、人類学的戦争論というものも有名なものがあるんですけれども、それについても触れられたら触れていきたいなというふうに思っています。

あとは軍産複合体との陣地戦に向けてということで、序論で触れましたが、ここは別の視覚から報告していけるかなというふうに考えています。

第 1 章 ヴィリリオの戦争批判

冷戦以降のヴィリリオの戦争批判

まずヴィリリオなんですけれども。ヴィリリオの冷戦下の純粹戦争論ですね。この紹介から始めますと、結局、国家間の戦争、これは全面戦争なんですけれども、それは冷戦時代にはなかったんですけども、しかしその代わりに、日常の中に永続する軍事的審級そのもの、こういう事態がある。そして、平和共存と言うんですけども、それは実は日常生活の諸々の中への軍事的なものの浸透であるというふうに言えるわけですね。ですから、軍隊の脱制度化を考えようというふうに提案しているわけです。

その次です。世界大戦が 2 つある中で、結局、テクノロジーが変わってしまったというふうに見ています。

次に、日本でしたら、1940 年体制ということで、これが敗戦後の占領下においても継続されて、それが現在に至っている。それがさっき説明した日本における官僚支配ですね。市民社会の中に官僚が膨大な陣地を作っているということの基礎になっているんです。アメリカの場合にしても、そういう体制というのは続いているし、ヨーロッパも続いている。アメリカの場合、端的に軍産複合体になっていくわけですね。

あと、国家的テロリズムというのは、国家間戦争ではなくなった時にこういう形になっているという、これは予測ですね。

また、核の君主制を打ち倒そうというふうな問題提起もしています。

冷戦後のヴィリリオによる戦争批判なんですけれども、現代の戦争の特徴を、フリードマンの『戦争の未来』（中央公論社、2012 年）という本が適切にまとめているんですけれども、それによれば、ハイブリッド戦争、それからサイバー戦争、ロボットとドローン、メガシティと気候変動、そういうことを挙げています。ヴィリリオはそういう問題に対してきっちり捉えているんですね。

ヴィリリオの戦争体験

この人は、10歳の時に戦争を体験して、これはひどいということで、戦争に対する批判をやるということをライフワークにしているんですけども、フランスの学界のある意味大御所なんですね。大御所ですから、いろんな情報を収集する能力があるわけですね。私なんか全然こんな話はわからないんですけども、とにかく、電磁波を利用するようになったというふうに言っていて、電磁波というのは光速ですから、もうそれ以上の速度がない、そういうものを使うことになったことで、どうなるんだという問題意識ですね。事故というのがここ出ていますけれども、事故というのは一貫して彼が言っていることで、飛行機を発明することによって航空事故が起こる、それをどう考えるかということが重要だということを言っている、そういう人なんです。

世界時間・戦争の映画化・第2の軍産複合体

その次に、電磁波を利用したら世界時間になってしまうということですね。それまでは、みんなそれぞれ固有の時間があって、日付変更線があって日が変わるみたいな、そんな話だったんですけども、今やリアルタイムですね。ですから、この講義に地球の裏側からでも参加できるわけで、そうすると、もうそれは世界時間という形で成立している。この世界時間というのがすごく問題だというふうなことを彼は考えていますね。

あとは、もう戦争は映画となった。現在では SNS ですね。とにかく第一次世界大戦までは戦争はいつも地図を用いて実行されていたけれども、それ以降、戦争は一つの映画になった。第二次大戦はイデオロギー戦争であり、連合軍とファシズムないしはナチズムとの間の見解の闘争となったということですね。

あと重要なのは、軍産複合体の技術の変遷ということですね。今やもう人工衛星、それからアルパネット、インターネット、そういうものが発達することで、そういうレベルでの軍拡競争になっているわけですね。これはアイゼンハワーが軍産複合体は危険だということを退任時に漏らしたという話がありますが、そういう問題に対してどうするかということですね。ついでに言うと、やっぱりバイデンは軍産複合体の操り人形みたいな形になっているような気がします。

ヴィリリオによれば、最初の軍産複合体は、より一層恐ろしい第2の軍産複合体に転化した。ベトナム戦争や電子技術による戦争の形態から生じた軍産—科学複合体ができた。ベトナム以来、戦争は本質的に電子技術的な現象になりました。ドローン、人工衛星、ミサイル誘導技術、そして湾岸戦争でも見られた枯葉剤爆弾のような新<原子爆弾>が用いられました。同時に、世界中に行き渡る情報が展開されます。国家安全保障局は情報操作を行い、一種の世界情報省になっています。それは敵側の情報だけでなく、世界中の情報を受け入れています。従って、科学の軍事化ではもはやなく、情報の軍事化、科学知識の軍事化が進行しています。こういう科学のあり方に対して、ヴィリリオは一貫して批判しようとしているんですね。

私の見立てでは、この後も何冊か本を出しているんですけども、それを見ても、最終的な結論には到達していないなという感じなんですけれどもね。それは、次回でもし余裕があれば取り上げたいと思います。(次回は企画されていません。)

NATOの空爆、コソボ紛争

そういう体制が結局、すごく民主主義ではなくなるという話をしているんですけども、その次はNATOの空爆ですね。コソボ紛争に関して、その行方のいかによらず、それゆえ、恐怖の不均衡という問い——湾岸戦争での擬似的勝利以降、隠蔽されていた——が提起される。大量破壊兵器の無際限の拡散は国家間の抑止の成り立つ余地をもはや少しも残さないのではないか。

「人権」の名における戦争、人道的戦争の遂行を掲げるとなれば、敵との停戦交渉の余地は奪われる。敵が暴虐者、人類の敵である限り、総力戦、そして無条件降伏という極論以外の選択肢は残らない。そういう戦争の見通しを書いています。

国際安全保障問題の正当な担当機関たる国連の頭越しに実行された、時ならぬバルカン空爆は、それゆえ、様々な意味で、国家間紛争の本質の根本的变化を告げている。

この磁気嵐云々というのはちょっとよくわからないので飛ばしますが、その結果が、「人権の名において」開始される紛争下での被害状況の奇妙な転倒である。死傷者はその大多数が民間人で、両陣営の軍事関係者は一種の被保護者ようになる。NATO にとっては、軍人が知らなかった戦争、こういうことになるわけですね。

つまり、対イラク戦争で実現された電子戦に続けて、合衆国は情報戦を開始するに至ったわけである。このシステムの実効性は、各国領土上空への人工衛星の恒常的配置、収集された情報のリアルタイムでの伝達、そして、各参謀本部に伝達されたデータの迅速な解析能力という三つの基本原理に基づく。今のウクライナでもこういうことがやられているわけですね。

映像の警察化

そういうことになってくると、映像の戦争じゃなくて映像の警察化が起こるというふうに言っています。テレビを使って何かできるというのは、もう一つ私よくわからないので、どなたかご存知だったら教えてほしいですけども、テレビの電波が何か独特な電波で、それを使っているんなことができるという、そういうことを言っています。

ペンタゴン CNN プールという巨大な衛星光学装置は、それゆえ、「天上の目」に対する諸国民の全面的露出または公式的通告なのである。

あと、アメリカというのは奇妙な国ですから、軍事開発した技術などを民営化していくんですね。ですから、今衛星の画像を民間会社が組織しているような形になっていますよね。それで、民間がウクライナの問題に関してあれこれ言っているという、こういう時代になっています。

さらに、国家画像地図局というのが 1996 年に誕生している。当初、ペンタゴンおよび CIA のための航空・衛星写真の処理・配信を目的としていたが、2 年後には交易の世界化に伴い重要性を増し続ける民間映像の特権的中継地点となるべく、商業映像の流通管制に関わることになった。こういうものも民営化されていっているということで、情報が警察機能を持つようになっていくというふうに指摘しています。

NATO とアメリカの微妙な関係

次にこれですね。ユーゴの空爆は、当然、難民が大量に発生するわけですね。その難民の発生ということを予測したような動きが、既に EU の中にあったということを言っているわけですね。今も、ウクライナからの難民はすごいですけども、ということ自体をむしろ、一つの利益にしようという、こういう力が働いているようですね。

結局どうなっているかということ、国家主権、主権国家というものの自体が非常に脆弱になっているということですね。

NATO 自体も、アメリカにとっては、どうも、配慮しなきゃいけない存在でなくなりつつあるんじゃないかという予測もしています。コソボ紛争の顛末ですけども、結局、陸軍を出さないと解決しないというふうな形に最終的に NATO も決断して、その決断を知って、妥協するんですけども、そういう形にならざるを得なかったということで、ある意味 NATO の失敗みたいな話があって、それをアメリカはこういうふうな形で考えているということですね。

アメリカというパワーの「グローバル主義的」側面は、地政学的諸関係の急激な世界化の帰結であると同時に、それ以上に、我々を乗せたこの天体の惑星物理学的な有限性の帰結なのだが、この側面を前にしてみれば、ヨーロッパ／中近東上空で展開される航空宇宙レベルでの作戦行動の重要性はよく理解されるだろうし、さらに、米本土ミサイル防衛構想の研究開発に着手するというクリントン大統領の最近の決定を考え合わせれば、地球周囲の宇宙空間の統帥に関する自らの優位を確実にしようという合衆国の意思がよく理解さ

れるはずだ。というふうに言っています。

結局、アメリカの目的というのは、ウォール街の巨大市場と競合する経済圏を一つずつ消耗させていくことがその目的だろうと。NATO は現在、対ロシアとの関係、中国との関係で、同盟国ということになっているんですけども、どうもそれは現代的な段階でのそういうことであって、いずれそれも捨てられてしまうという可能性もあるんじゃないかということ予測していますね。

国家主権の揺らぎ

結局、何が起きているかということで、その特徴的なことを言っているんですけども、国家主権の揺らぎということですね。パワーの論理が絶対化する時、市民的平和と法治国家という政治の論理は圧倒され、社会の内破というパンドラの箱が開かれる。旧ソビエト連邦が最初にそれを体験し、他の諸国はその後を追いつつあるという、何か予言的に言っているんですけども、この社会の内破ということは、結局アメリカにも起きているわけですね。アメリカも、ベトナム戦争をやったことで、それがアメリカ社会の内破を促進しましたけれども、多分同じようなことがまた起こるんじゃないかということを考えなきゃいけない。

EU の未来

ヨーロッパ共同体の未来、EU ですね。ヨーロッパ共同体は 20 世紀を通じて真の意味での百年戦争なんとか生き延びてきた一つの大陸の防衛に関して、相応の政治的主権を確保するだけの能力が欠けているというふうに、ヴィリリオはこの時点で評価しています。

実際、現在もそうでしたね。やっぱり政治的主権を確保することができれば、多分戦争は回避できたというふうに思うんですけども。ついでに言っておけばウクライナの EU 加盟問題で、ハンガリーが抵抗しています。

そこで結果はこれですね。食糧危機と難民、移民の発生。これがさらに気候変動も加わっています。このバルカン化、シチリア化、内部植民地化というふうなことが、至るところで起こるような、そういう時代の入り口にあるというのがヴィリリオの理解です。

身体性による革命的抵抗の可能性

そういうのにどう抵抗するかということで、彼は身体から行くんですね。身体性から行きます。世界時間だと、私は例えばワシントンにいる友達と触れ合うことができるわけですね。私の連れ合いは、今、老母の介護でここにいないんですけども、特にヴィリリオが言っているのは、フランスで離婚が多いので、離婚するということはおかしいと。やっぱり身近な人を大事にせないかんというようなことを言っているんですけども、そういう身体性ということバネにして、何とか抵抗できないかということを構想しています。

これは私あんまりよくわからないんですけどね。インターネットによる隣人の疎外というふうなことですね。あなたのそばにいる人よりも遠くにいる人にいっそう近いという、こういう現実が出てきている。これはちょっとおかしいんじゃないかということをいろいろ言っているんですけども、これが果たして力になるかということが問題ですね。

科学技術による進歩への抗い

あとは、科学技術による進歩という観念への抗いが必要だということですね。まあ簡単にいきましょう。真ん中、新しいテクノロジー、広い意味でのメディアは、いわば占領軍です。

私はレジスタンス運動家の仕事をしていますというふうにヴィリリオは言っているんです。

結局は、この世界時間に対する抗いということ、彼は提案しているんですね。元々、速度の理論家と言われて、速度の問題について彼は研究してきたんですけども、やっぱり絶対速度に達して、電磁波を利用する世界になったことで、逆にそれに反対してローカ

ル時間を守っていくようなことが重要でないかという提案をしているわけです。これについては私はあんまりちゃんと理解できないんですけども、そういうことを言っている。

そのためには、言葉を取り戻すというふうなことを言っていますね。書くこと、読むこと、これをやらなきゃいけないんじゃないかということを行っています。

結局、今どういうことが起こっているかということで、抑止力の文化から戦争の文化になっているというふうに言っていますね。その端的な特徴が、情報化爆弾ということですね。情報化爆弾というのは、そういう本も後で出てくるんですけど、今日は紹介できませんけれども、情報化爆弾は、原子爆弾と抑止力の必要性から生まれました。今日では、原子爆弾による抑止力は、地域ブロックの政治の目的によって逆を突かれています。反対に、情報化爆弾と情報の力は相当な割合を占めるようになっていきます。従って、情報科学、学識、科学知識による抑止力という問題が提起されます。こういうことを考えないかと言っているんです。

第2章 現代の戦争論

1. ペンタゴンの戦争論

ミアシャイマーの経歴

ミアシャイマーは1947年生まれで、ベトナム戦争真っ盛りの時代にウェスト・ポイントの陸軍士官学校を卒業し、5年間空軍に勤務。軍隊の経験もあるということですね。その後ハーバード大学の研究員となり、1982年からシカゴ大学に赴任、現在に至っています。アメリカの外交戦略に大きな影響力を持っていると言われている外交問題評議会（CFR）の一員で、この本を書くために特別研究員を務めたと訳者は紹介しています。

訳者によれば、国際政治や軍事戦略論の分野では、リベラリスト（平和を希求し、世界政府による恒久的平和を構想する）、これは元々カントの『永遠の平和のために』という本があるんですけど、そこを淵源とするというふうに言われています。それから、リアリストですね、これは安全保障の観点から戦争を捉えるとの対立があり、ジョン・J・ミアシャイマーは後者の系譜に属しています。

でも、彼のリアリストぶりは徹底していて、ブッシュのイラク戦争には反対の論陣を張ったんですね。そして、ネオコンと対立しました。その理由は平和を求めたのではなくて、戦争に失敗しアメリカにとって損になるから、アメリカの国益を損なうという理由で反対したという人なんです。

あとは、イスラエルロビーについての暴露本も書いていまして、これは、アメリカのイスラエル政策に大きな影響を与えたと言われています。そういう人なんです。

世界についての五つの仮説

「国際システムには、国家を互いに恐れさせる要因が三つある。

- ・世界の国々の上に存在し、全世界の安全を守ってくれる中心的な権威が存在しない。
- ・どの国家もある程度の攻撃的な軍事力を持っている。
- ・国家は互いがそれぞれ何を考え何をしようとしているかを完全には把握できない。

これらの要因により、すべての国家は決して拭い去ることのできない恐怖をもつのであり、自分たちが他国よりも国力をあげれば『自国の生き残り』の確率を高くすることができると考えてしまう。」

その次に世界ですね。世界については、

「・国家は国際政治における主な行為主体であり、彼らを超える権威は存在しない。

- ・あらゆる国家は、その程度の違いはあるが、攻撃的な軍事力を持っている。
- ・国家は他国の意図というものを確実に知ることはできない。
- ・『生き残り』が国家にとって最も重要な目標であると想定している

・国家は互いに恐れる傾向を持つのだ。」(『大国政治の悲劇』、444～6 頁)

プーチンが言っていましたね。ロシアの生き残りが問題になったら核を使うんだと。そういうことなんですね。

あと、世界覇権国は生まれようがないというふうリアルに見ています。

アメリカは現在地域覇権国であるが、自分の裏庭に危険な敵が現れることを警戒している。アメリカが世界中のほぼ全域に基地を置いて政治介入できる最大の理由は、西半球で深刻な、これはラテンアメリカも含めてですね、脅威に直面していないからだ。国際的なアナキーの中で生き残るための最良の方法は、唯一の地域覇権国になることなのだというふうなことを言っています。

これはペンタゴンのやり方を本当に簡単に、うまく説明していると思うんですね。この程度の理解をやったり小学校で教えないかんのじゃないかと、日本の場合ね、そういうふう思うんです。というのも、この間エマニュエルという大物が、空席であった駐日大使に就任して、どうもこの間、林外相がロシアの裏庭を歴訪しましたよね。それに続いて、この間、岸田首相が中国の裏庭を歴訪しています。それ、意味わかってやっているのかなというのが私の疑問ですね。そういう意味で、これぐらいのことはイロハとして理解しておかないと、もうえらいことになるなというふうなことを考えました。

冷戦後のアメリカ

彼がどういうふうにアメリカの行動を評価しているかということですね。それは結構リアルに言っています。1989 年の冷戦の終結後、小国に対して自由に戦争を仕掛けていったというふうに言っていますね。それで六つの戦争を闘っている。イラク、ボスニア、コソボ、アフガニスタン、そしてリビアというふうに言っていますね。また、2001 年 9 月 11 日からは、世界中でテロリストたちとの戦いに没頭している。当然だが、ソ連の脅威が薄れた中、アメリカは大国政治への興味を失ったと言える。

ところが中国の台頭は、この状況を変えつつあるように見える。その理由は、この流れが国際システムの構造そのものを根本的に変えてしまう可能性をもっているからだ。もし中国経済が今後の数十年にわたって急激な成長を続けるとすれば、アメリカは再び潜在的なライバル国に直面することになり、大国政治が完全に復活することになる。というふうに予告をしていますね。

攻撃的現実主義

ミアシャイマーのリアリズムとは、国家の理想は、国際社会の中で「覇権国」になることであるということですね。この理想をめざして各国は「攻撃的現実主義」に依拠して覇権争いをしている。この攻撃的現実主義というのが一方、防衛的現実主義というものもあるんですけどもね。そうじゃなくて、彼は攻撃的の方を選択している。世界制覇を握る国家は今後も現れそうにない。その理由は、面白いんですけども、主に大西洋や太平洋のような大きな海を越えて戦力投入をするのに、巨大な困難が伴う点にある。今日、最も豊かで強力なアメリカでさえ、全世界を支配することは不可能だ。しかしアメリカが西半球で行ったような地域覇権なら達成可能だ。よって、すべての大国にとっての究極の目標は、世界のある一定の地域を支配し、他の大国が自分以外の地域で覇権国にならないようにすることだ。そういう地域覇権国どうしの争いを考えているということですね。それで、今度は中国が台頭してきたら、中国とアメリカの間のそういう覇権争いになるという意味ですね。

冷戦下の平和状態の意味

例えば、冷戦下にいわゆる括弧付きですが、平和が続いたということに関して、彼にとってはこういうことなんですね。アメリカはどちらの世界大戦においても平和を築くために戦ったわけではなく、危険な敵国が地域覇権を達成するのを防ぐために戦った。例えば

日本であるとか、ドイツであるとか、そういう国に対して、そういう国が地域覇権国になるのを防ぐために戦った。平和はこれらの諸力の結果として生まれた、喜ぶべき副産物にすぎない。冷戦にも同じことが当てはまる。米軍がヨーロッパに駐留したのはソ連を封じ込めるためであり、平和を守るためではなかった。冷戦の間の長期にわたる平和状態は、アメリカの抑止政策が成功したために生じた、幸運な成果だったのである。だから平和を求めて何かやるというふうなことは、金輪際アメリカにはないんだという、こういう認識なんですね。

リベラルなアメリカにおける権力政治

しかもこれですね、リベラルなアメリカにおける権力政治。アメリカ国民はリアリズムに敵対的な態度を取りがちである。リアリズムが彼らの価値観と衝突するからだ。アメリカ人は、基本的に楽観主義者である。国内・国外を問わず、政治というものは常に望ましい方向に発展するものであり、それが可能であると考えている。こうしてアメリカの政治家はレトリックと実践の乖離を使い分けることになる」と指摘しているわけですね。

アメリカ人は「リアルポリティーク」を嫌うので、公式の場での外交議論にはたいいていリベラリズムの言葉が使われることになる。ところが安全保障政策を担うエリートたちは、密室の中ではアメリカの主義・原則ではなく、あくまでパワーの計算に基づいて政策を練っている。つまりアメリカは国際システムの中ではリアリストの論理によって動かされているのだ。かくしてアメリカの対外政策における実際の行動と、公式の場で使われるレトリックには、大きな隔たりができることになる。このような現実とレトリックの間の隔たりを、当のアメリカ人自身はほとんど気づいていないというふうに言っていますね。

2. 国際政治の理論の古典一瞥

E・H・カー『危機の年』

結構もう時間を食っちゃったので、ここのところは本当に簡単にいきましょうかね。ミアシャイマーの本の中に、リベラリズムとリアリズムの対立構造で、その両方に対して批判的コメントをしているんですけども、リアリズムの典型的な本が 3 冊あるということで、カーの『危機の 20 年』(岩波現代双書、1952 年) ハンス・モーゲンソー『国際政治』(岩波文庫、全三冊、2013 年) ケネス・ウォルツ『国際政治の理論』(勁草書房、2010 年) の 3 冊です。カーはイギリスの外交官で、のち歴史家です。モーゲンソーはドイツのワイマール共和国時代に活動していたんですけども、ナチスが台頭したことでアメリカに亡命した。ケネス・ウォルツは大学教官で、ミアシャイマーはまだ若いですね、47 年生まれということですから。

カーは『ボリシェヴィキ革命』(みすず書房、全三巻、1970 年) が有名なんですね。これは私がソ連論を書く時に一生懸命利用しましたがけれども、『危機の 20 年』もマルクスの方法に依拠して書いているんですね。これが何でリアリストの本なのかと言われると、リベラリストが第一次大戦後に国際連盟結成に至る世界平和を作っていたんですけども、これが実は裏切られていくわけですね。それが何故かということを彼は分析したわけです。彼自身はユートピア的リアリストというふうに自分を規定していますけれども、単純なリアリスト、戦争があっても当然だみたいなことではない。

カーがユートピア主義と言ったのは、ベンサムの自由放任主義のことで、左翼だったら空想的社会主義というふうに考えるんですけども、そうではないです。マルクスに関しては、リアリスト側の人物として捉えていますけれども、しかしながら、未来社会に関する楽観主義については否定していますね。

カーの最初の著作は『ドストエフスキー』(筑摩双書、1968 年) で、あとマルクスやバクーニンの伝記も書いています。これらは外交官時代に書いているんですね。マルクスの伝記を読みましたがけれども、これもよくできた本です。先にあげた『ボリシェヴィキ革命』が代表的な著作ですけども、結局マルクス主義に好意的な立場から怜悯な分析をしてい

る。

あと、1961 年の講演をまとめた『歴史とは何か』（岩波新書、1962 年）という本がありまして、これもちょうと取り寄せてみたんですけども、この最後のところで自らをオプティミストというふうに規定しています。英国病に警鐘を鳴らしつつ、進行しつつあるアングロサクソン以外の世界の大変動、これは民族独立とか、植民地の独立とか、そういうことがずっとあったわけで、それを脅威としてとらえるだけで、理解しようとしていないというのはけしからん、こういうふうに批判していますね。

ハンス・モーゲンソー『国際政治』

モーゲンソーは、版を改めるたび結構大幅に書き換えられているんです。この人は独特、やっぱりドイツからナチスから難を逃れるために亡命したという経歴があるだけに、結構左翼の知識もあって、この本でレーニンの帝国主義論の検討とかもしているんですね。ところが、科学について結構執拗に批判しようとしています。これが特徴で、『科学的人間』という本があって、翻訳では『科学的人間と権力政治』（作品社、2018 年）という本なんです。それとか、もう一つ新書で『人間にとって科学とは何か』（講談社現代新書、1975 年）も出てまして、これは近代合理主義の批判ですけども、ヴィリリオの科学批判に通じるんじゃないかなということですね。これはちょっともし次回企画できるとしたら次の課題になるんじゃないかと。彼も、ベトナム戦争に反対して政府要人から外れています。

ウォルツの『国際政治の理論』

ウォルツの『国際政治の理論』というのがあって、この本は一応、体系的な国際政治の理論を作ったというふうに言われています。それは平和共存の時代の理論なので、国際的なアナーキー状態においては、多国の関係よりも 2 極の方が安定するということを言ったわけですね。これをちょっと見てみると、ホブソンとかレーニンも結構評価しているんです。ホブソンは、私的な利害、主に資本家によって、自国以外の場において彼らの経済的利益を確保するために、政府機関が利用されることを意味するというようなことを言っているんですね。ならば当然、アメリカの政府を支配している軍産複合体に注目しなきゃならないはずだと思うんですけども、それを取り上げるべき第 7 章とか第 8 章をぱっと見たんですけど、全然そういうことはやられていません。

ミアシャイマーには『イスラエルロビーとアメリカの外交政策』もある

あと、さっきも言いましたが、ミアシャイマーには『イスラエルロビーとアメリカの外交政策』という非常に優れた本があります。これに倣って軍産複合体のロビー活動について同じような本を出せば、「大国政治の悲劇」の幕を引くことが可能となるきっかけになると思っているんですけどね。彼は今でも健在で、ウクライナ戦争について発言してます。

アザー・ガットによる国際政治理論における論争の総括

アザー・ガットの『文明と戦争』という上下の本があるんですけども、これは国際政治の議論の総括をしているんです。彼自身は進化論の立場で、進化論から見たら、適者生存という定義があるじゃないですか、それを採用して、もう戦争は不可避だという論者なんです。これは参考のために引用したので、引用だけでここは紹介しません。（引用は『ASSB』第 30 巻 1 号にあります）

第3章 戦争はなくせるか、人類学的戦争論

キーガン『戦略の歴史』

キーガンという人は、イギリスの士官学校の教官です。戦争史をライフワークにしています。身体がちょっと具合が悪くて兵隊に行けなかったという経歴を持っている人です。

この人はクラウゼヴィッツのテーゼを批判して、戦争を文化として位置づけて、人類学的戦争論を記述しているわけですね。戦争は人類の歴史と同じくらい古く、人間の心のもっとも秘められたところ、合理的な目的が雲散霧消し、プライドと感情が支配し、本能が君臨しているところに根ざしているというふうに見るわけですね。ですから、クラウゼヴィッツの理論だと、政治をやっぱり合理的なものという枠組みで考えるわけですから、そうではないということを言っているわけです。つまり戦争とはつねに文化の発露であり、またしばしば文化形態の決定要素、さらにはある種の社会では文化そのものであるというふうに言っています。これがなかなか大変なところで、日本もこの間の戦争で、一気に戦争の文化が全面化してきましたね。

キーガンの本を見ていたら、クラウゼヴィッツの話がいっぱい出てきて面白いんですけど、そんなことやっている暇ないので、『戦略の歴史』（心交社、1997年）とは別に、『戦争と人間の歴史』（刀水書房、2000年）という小さい本があるんですけども、これは結構ある意味、面白い本です。というのは、日本人の平均的な戦争に対する意識と対極を成しているんですね。要は、軍、軍人があるから安全保障が保てているんだと、こういうことなんです。それは何でかという、やっぱりイギリスというのはずっとオフショア・バランスですよ。海を隔ててヨーロッパと対置している。ですからEUを抜けたりもできるわけですね。しかも、第一次大戦以降ずっと勝者の側にいたわけです。それで、イギリスの安全保障における軍の役割についてのイギリス人の認識がずいぶん違うということを考える素材となるんじゃないかなと。そして、「自由の条件は永遠の監視である」。責任ある人々はすべて、戦争の脅威からの自由を求めている。そして、それは、民主主義諸国の職業的戦士たちの義務への貢献によってのみ、保障されている。彼らは、我々の尊敬、信頼、支持を受けるにふさわしいと言っているわけですね。日本で自衛隊に対してこんなこと言う人はいないですよ。でも、こういう国が普通なんです。日本だけ異常なんです。

暴力は、法の支配が用いることのできるもっとも恐ろしい道具です。もし戦争を終わりにしようとする努力が実を結ぶのを見たいと思うのであれば、戦争の原因を検討することに尻込みをしてはなりません。同じように、暴力が行使されるのに尻込みをしてはならず、また、平和のために力を執行する名誉ある戦士たちに荣誉を与えることに尻込みしてはならないのですと、こういうふうと言っているわけですね。

このキーガンの提言に対して、敗戦と平和憲法とアメリカの核の傘で覆われた日本人の意識から見た戦争論とその見地からの外交の可能性が見えてくる。私はこれを、逆に逆手を取る必要があるんじゃないかというんですね。日本だけ変な文化だということ、これは逆手に取れるんじゃないかなということですね。

キーガンはこういうことを言っている。来るべき戦争を受け入れる余地がない世界の政治経済は、新たな人間関係の文化を求めているということを認識しなければならない。われわれが知っているほとんどの文化は戦士の精神によって鼓舞されてきたが、現在起こりつつある文化上の変質は過去との断絶を求めている。そしてそれには、前例は存在しないのである。とはいえ将来の戦争が世界と対決するときの脅威にとっても前例は存在しない。疑問の余地のないほど好戦的だった過去。そして想定される平和な将来。本書のテーマはこういった過去から将来への、人間の文化に移行の構図を作成することである、と言っているわけですね。

これはひょっとして日本の出番だというふうには受け止めないといけないんじゃないかなということですね。

アザー・ガット

あともう一つ、そのさっき紹介しませんでしたアザー・ガットですね。ガットの本でも、ヨーロッパの中にこの間社会が安定して裕福になって、みんな豊かになったことで、厭戦気分が蔓延しているというふうなことを言っていました。文明国はそうなんだけれども、しかし、非ヨーロッパの、いわゆる第3世界ですね、そこはもう戦争がいっぱいあると、

こういうふう言っているんですね。ですから、戦争の文化に対する別の文化というふうなことを追求していける可能性というのが、日本にあるんじゃないか。日本の非戦・非核という、これは新外交イニシアティブのスローガンですけれども、そこをうまく発展させていくということで、陣地戦の目標として、陣地戦のスローガンとして、出すことができるんじゃないかなということですね。

国際関係論がいろいろありましたが、いずれも軍産複合体の研究に向かっていない。何かというのは、やっぱり、みんな自分の研究資金や情報がそこから出ているからという、そういうことかなと、一瞬思いました。

マーチン・ファン・クレフト他

あとは、この人はイスラエルの研究者です。オランダ生まれなんだけれどもイスラエルに行って、イスラエルで講義をしている人ですね。『戦争文化論』（原書房、2010 年）という本と『新時代戦争論』（原書房、2018 年）があります。カントの『永遠の平和のために』という本についての批判をしていますので一言言っておきますと、封建制だから政府が戦争をやるんで、民主制になったら戦争はなくなるんだとカントはそう言ったんだけど、ところが共和国になったフランスは戦争を止めなかったと、こういうことを言っているんですね。エリートの陰謀に焦点を当てたカントとその信奉者たちは、一般大衆がどの程度戦争に魅力を感じ、しばしば戦争を望み、戦争を求め、戦争を喜ぶか、過小評価していたようだ、というのです。個の文化ということを私達は十分考慮しなきゃいけないというふうに思います。

マーガレット・マクミランの『戦争論』（えにし書房、2021 年）というのものもあるんですけども、この人は抑止力が核だけではなくなくなった、もっといろんなものが増えてきている。人工知能とか自動殺人機械とかサイバー戦争とか、そんなことになっているので、こういうもの自体が抑止力を生むんじゃないかなということに期待をしているという、そういう本です。

ガットは、さっき言いましたね、西側世界が厭戦気分を醸成していることを認めているわけですけども、でも世界全体がそうならないから戦争はなくなるならないという、そういう話ですね。『文明と戦争』（中央公論新社、2012 年）の最後のところは、「戦争の未来」という章ですが、将来の発展がどのような影響を大規模な暴力の使用に及ぼすのかは、我々の想像の域を超える、といことで、わからんと言っているわけです。

後記 報告を終えて

今日の報告を準備する過程でいろいろ思いついたことがありますので、最後にそれを報告させていただきます。

まず、添付した『季報唯物論研究』の論文で、官僚と陣地戦を闘うためには、官僚の背後にアメリカの権力が控えているということで、非戦・非核の陣地戦を構想することが問われていますということなんです。

こんなことをバーっと書いたんだけど、まさか今こんなことをすぐ仕事に取りかかれるとは思っていませんでした。非戦・非核という新たな外交的立場を活動家が構築することで、50 年単位で国際情勢を動かす展望を持つことが必要だということです。その時に、日本のいわゆる平和ボケしたどうのこうのと言われているんですけども、むしろその積極的なところを引き出す、そういう逆の発想が今こそ問われているんじゃないかなということですね。

大体、アメリカの支配を認めている人たちは、何か日本人を自虐的に捉えているんですけども、それじゃ何の展望もないので、そうじゃなくて、むしろそれを長所と捉えて、それをアメリカにどのように輸出していくかということを考えるべきじゃないかなというふうなことを今は考えています。

結局、陣地戦ということも、これまでは、私自身も含め、階級闘争の理論から位置づけ

られていたんですね、

ですから、日本の野党、社会党・共産党の陣地というのは、例えば生協なんかは陣地にされていたんです。それは、党がまず先陣にあって、その党の影響を作っていくための陣地みたいな理解なんですね。党の運動よりも陣地の運動の方が優位にあるというふうなことには決してなっていないんです。でも、今私たちが考えなきゃいけないのは、党派の運動よりも陣地を作る運動の方が、むしろ上というのはおかしいけど、そっちの方が重要だというふうな新しい陣地戦の理論というのを作らなきゃいけないということで、今その作業をやっている最中なんですね。

さっきも言ったように、階級闘争の理論は、政党政治の理論であり、運動の指導部は階級政党なわけです。政党政治が行き詰まっているにもかかわらず、新しい運動がいたるところから噴出しているわけです。そういう運動はまだ理論を獲得していないし、組織形態も見えていないというふうに私は見えています。気候変動に抗う闘い、格差拡大に抗う闘い、ジェンダー平等をめざした様々な抗い、原子力発電所に対する抗い、バイオテクノロジーに対する抗い、人種差別に対する抗い、特に日本では官僚支配に対する抗い、こういうのがあるんですけども、これを階級闘争の理論では指導できないのではないかと思いますよね。

ロシア革命が成功したことで、階級闘争の理論はその正当性が歴史的に証明されたことで、左翼だけでなく、一般的な理論として人々に理解されてきたわけですね。ソ連崩壊以降、歴史の見直しなどがあり、この理論の正当性に疑問符がつけられていますが、まだ影響力を持っているわけです。何よりもこの理論は、ブルジョアジーとプロレタリアートという二大階級の利害の対立から階級闘争を説明するという極めて単純な枠組みを持っていて、容易に理解でき、しかも現実の分析に応用可能ですよね。

私が陣地戦といっていると、それを聞いている人は、階級闘争の理論から組み替えちゃうんですね。そういうことを何回か経験しました。

しかし、この階級闘争の理論は政党政治の組織化を導き、党派による政治運動をつくりだしましたけれども、それは結局、ベクトルを統一しようという政治力学に囚われるわけです。政党政治は、さっき言った気候変動とかジェンダー平等とか、いろんなことに対して関わるんだけど、関わる時にベクトルを統一するという政治力学を伴って関わってくるわけですね。そうすると結局、運動にとっては阻害要因になっているというふうなことが多々あるということですね。ですから結局、一言で言ったら人類学的な危機なんですけれども、人類学的危機に対する取り組みを政治運動に組み込むことが目的でやってくるので、それぞれの社会運動の発展に寄与するというにはなっていないという現実があるんですね。

そういうことで、今日の人類学的危機に抗う運動は、市民社会で支配者側が陣地を拡大しようとし、こちら側がそれに抗って陣地を作ろうとしているという陣地戦の理論で、運動の発展を保障できるのではないのでしょうか。

あと、「より良い社会をめざして『陣地戦』とは何か」という、縮小社会研究会で報告をしたのですが、その報告がネットに出ていました。次で見れますので、また後でご覧ください。

[http://shukusho.org/data/net-seminar/sakai\(pwp2022.2.20\).pptx.pdf](http://shukusho.org/data/net-seminar/sakai(pwp2022.2.20).pptx.pdf)

陣地戦の方法というのは、相手の陣形の調査と、こちら側の抗いの陣形の形成という、ものすごく単純なことなんですね。軍産複合体に対する陣地戦の陣形形成を有機的知識人の連携から始める。この有機的知識人というのは、グラムシが言っていることで、結局、知識人というのは、いわゆる大学との教官ですね、そういう人たちを指すんですけども、そういう人たちではなくて、普通の人が知識人として活動していくということをグラムシは構想しました。そういう人たちが有機的ですから、繋がらなきゃいけない。そういうものとして、実際に作り出すにはどうしたらいいかということで、私が思いつくのは次のよ

うなことです。

『アメリカ暴力の世紀』というダワーの本とか、それからダニエル・エルズバークの『世界滅亡マシン』とか、全部、軍産複合体に対する暴露なり分析なりなんですね。ジェイコブセンはジャーナリストです。あと、ファインスタインは元政治家で、もうえらいことになってるということで、これ一生懸命書いたということですよね。DARPA の中にいて、そこから寝返って暴露したという人なんかもあります。実は、今回これをやる予定だったんだけど、ジャーナリストの本って報告しにくいんですね。ものすごい面白いですよ。読んでいたらもう本当面白くて、いろんな逸話がいっぱい入っているんです。面白いんだけど、それをまとめて報告するということにはなかなかならないので、そしたらこれらの本の概要を紹介して、それをどこかのサイバー空間に貼り付けておくというふうなことぐらいから始められるんじゃないかな。これは今すぐにでも始められるんじゃないかなあということで、そういう構想を考えました。

それで、今日の報告を準備する過程で、元々私が多少研究したのは、国際信用システムです。国際信用システムに関しては、結構時間をかけて勉強してきたんですけど、それから言えることは、現代の資本主義というのはものすごく新しい生産力を開発しましたよね。いわゆる資本主義の枠内に収まりきれないような生産力をいっぱい開発してきちゃって、今や、ちょっと才覚のある人は、ネットを使って簡単に起業できるんですよね。

そういうことをやる人がいっぱい出てきている。もう資本主義の枠外で生活をしている人たちがどんどん生まれているわけですね。もちろん資本主義は資本主義で、そういうのを囲い込もうとして必死でやっています。何かプラットフォームで、その人たちが仕事を作るギワーカーとか、ああいう形で資本主義自体がそういう層を組織しようとしているし、それから、プラットフォーム企業は消費者の動き、消費者の労働を剰余価値の生産に結びつけるようなシステムを作っちゃっているんですよね。そういうこともあるんだけど、それ以外にやっぱり今のネット環境の中で簡単に起業して、やっていけるというふうな条件も生まれているわけです。そういう意味で、資本主義自体が全体を包摂しきれないような時代になってきているということが一つ。

それからもう一つは、いわゆる近代的利子生み資本というのは、企業に貸し付けて、資本家的企業が生産をして、上げた利潤の中から利子を払うわけですね。ですから、この近代的利子生み資本というのは持続可能なんです。ところが最近、昔の高利貸しですね、消費者に対する貸付、住宅ローンや自動車ローンも含めてですけど、そういうのが膨大に増えました。国際金融市場を見ますと、いわゆる高利資本を根に持つ負債、債務を証券化したものがむしろ大きくなっているんですよね、そっちが大きくなった。

ですから、世界の一握りの富豪がますます富んでいっているというふうな構図は、そういう国際金融市場の変容ですね。それを私はハイブリッド資本主義というふうに名付けて、そういう理解を広めたいんですけど、そういうことになっているということも大きな問題なんですね。結局、それはやっぱり資本主義が破局の時代にあると、これはラッツアラートという人がそういうことを言っているんですけども。

危機というのは普通に使われていて、恐慌とかは危機なんですけれども、危機というのは経済的な、株価を例にとると、ドーンと下がって、でもまだ上がるわけです。そういう短期的に一旦下がってまた上がるという、これが危機なんです。けれども、破局というのは、例えば50年とかいう単位でジリジリと衰退していくというイメージなんですけれども、どうもそういう過程に入っているのではないかということです。そういう破局の状態の中で、アメリカの軍産複合体というのは果たして生き残れるんだろうかという問題ですね。もちろん軍産複合体が戦争ばかり考えてけしからんとか、平和が必要だとか、そういう批判の仕方もあるんですけど、軍産複合体を支える経済基盤自体がもう大きく損傷していつているんじゃないかと。ですから、ヴィリリオが社会の内破と言ったんですけども、その社会の内破が軍産複合体にどういう影響を与えていくんだろうかみたいなことも、ちょっと考えていけるんじゃないかなとかいうふうに思っています。